

目指す学校像	『共働共励、共に育つ』の精神を基に、自分の家族を通わせたい学校を作る
--------	------------------------------------

重点目標	1 主体的・対話的で深い学びの実現 2 心と体の成長に向けた安心安全な学校づくり 3 地域との連携・協働の充実 4 教職員組織の充実
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学 校 自 己 評 価			年度評価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	<現状> ○全国学力・学習状況調査の結果から、国語、算数ともに、全国や県の平均正答率を上回っており、児童の学力の定着が図られている。 ○市学習状況調査の結果から、「学級の友達との話し合う活動では、内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていきますか。」の質問において、肯定的な回答をした児童の平均が、91.4%であり、主体的・対話的で深い学びに向けた授業が実施されていることが分かる。 <課題> ○市学習状況調査の質問紙調査の結果から、自ら課題を設定し、協働的な学びを通して解決を図ろうとする児童の割合が低い傾向にある。また、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果から「○○の勉強は好き」と学びへの意欲を示す解答の割合が減少傾向にある。	・学びの個別最適化に向けタブレット端末を活用した授業改善 ・第15次研究「学びをいかす子ども」をめぐむ教育課程の工夫改善に向けた研究の実施	①国語、算数において、スタディサプリ等のICTを活用した学習への取組状況を担任が確認し、児童が課題意識をもって学習できるよう指導を行う。 ②全国学力・学習状況調査において、児童が自己採点を行い、結果をタブレットに入力することで、児童自身が学習状況を把握できる指導を行う。	①国語、算数において、毎学期、担任が、児童一人ひとりのICTを活用した学習の取組状況を確認するとともに、課題に対する学習の達成度について指導助言ができたか。 ②児童が自己採点の結果を踏まえ、自らの学習の達成状況を把握し、改めて目標を立てて、目標の達成のための取組を計画して実行することができたか。	①教職員の自己評価においてICTを活用した個別最適化を実践しと回答した教職員が80%を超えるなど、児童一人ひとりの学習の取組状況を確認することができた。 ②全国学力・学習状況調査の結果から児童が、自らの学習の達成状況を把握し、改めて目標を立てて、目標の達成のための取組を計画して実行することができた。	B	授業におけるタブレット端末の効果的な活用を推進する。具体的には、各教科等における個別最適な学びや協働的な学びを一体とらえ、ドリルパークやスタディサプリなどをさらに活用する。また、教育委員会と連携して、学習状況調査の結果を確実に分析するとともに、課題解決に向け、年間を通じて授業改善を図る。	・タブレットの効果的な活用を推進することはよい。特に、キーボード操作の技能を向上させるような取組は、今後社会に出ても有効となる。 ・タブレット等のICTの活用も重要であるが、子ども同士の対話も重要である。対話的な学びを継続して指導することも忘れてはならない。
2	<現状> ○全国学力・学習状況調査において「学校に行くのは楽しい」の質問において、肯定的な回答をした児童の平均が、88.5%であり、全国や県の平均を上回っている。 ○昨年度、救急車を要請する児童の事故等が5件あった。また、打撲等のケガをした児童数が、のべ2874人であった。 <課題> ○児童一人ひとりの心身の状況を的確に把握し、教職員が連携協働しながら、組織的に支援・相談できる体制づくりを継続する必要がある。 ○児童が自ら危険を予測し回避したりするなど、安全な学校生活を送ることができる資質・能力をめぐむ必要がある。	・児童一人ひとりに寄り添った支援や教育相談体制の充実 ・主体的に安全な学校生活を送ることができる児童の育成に向けた取組の実施	①いじめを早期発見・早期解決するため、定期的なアンケートや面談等を確実に実施し、児童一人ひとりの状況を継続的に把握し支援する。 ②教育支援・相談に係る校内委員会ではコンピュータ等に蓄積した児童の情報を共有し、適切なタイミングで組織的な支援・相談を実施する。	①学校自己評価に係る児童の評価「いじめを発見した時は先生等の大人に話している(話そうと思う)」において、90%以上の肯定的な割合となったか。 ②学校自己評価に係る保護者の評価「学校は、いじめを見逃さず人権を意識した指導を行っている」において、90%以上の肯定的な割合となったか。	①学校自己評価に係る児童の評価「いじめを発見した時は先生等の大人に話している(話そうと思う)」において、肯定的な割合が88%であった。 ②学校自己評価に係る保護者の評価「学校は、いじめを見逃さず人権を意識した指導を行っている」において、肯定的な割合が98%となった。	B	いじめを早期発見・早期解決するため、定期的なアンケートや面談等を確実に実施する。また、児童一人ひとりの状況を継続的に把握し支援するため、定期的な情報共有等、保護者、行政との連携をさらに強化する。また、道徳教育を軸とした、児童に対するいじめ防止の指導を徹底する。	・いじめを見付ける工夫が重要である。特に、教職員の目で子ども同士の関係をしっかりと見届ける必要がある。 ・いじめの対応には、教職員と子どもとの信頼関係をつくる努力をする必要がある。また、いじめは組織で対応する。 ・ケガを防ぐ取組を充実することは大切であるが、子どもの活動を制限するなど消極的にならないようにする必要がある。
3	<現状> ○昨年度、学校運営協議会準備委員会にて、校訓「明るく、仲よく、進んで」を踏まえ、「自信をもち、健康でさわやかな子ども」など、目指す児童像を設定し、地域ぐるみで児童をめぐんでいくことを共有した。 <課題> ○本年度から実施する学校運営協議会にて、育てたい力について、さらに熟議を重ねて、その実現に向けて方策を定め、継続的な取組を検討し実施する必要がある。	・目指す児童像を地域・保護者と共有するための教育活動の公開及び情報発信 ・高砂小コミュニティ・スクール推進プラン(仮称)の策定と実施	①学校運営協議会や学級懇談会等において周知し、目指す児童像を積極的に地域や保護者と共有できるようにする。 ②学校だよりや学校Webページ等を利用して、学校運営協議会の取組等を、地域、保護者に広く情報発信する。	①学校自己評価において「目指す児童像を地域、保護者と共有することができた」と回答する割合が80%以上となったか。 ②学校Webページにコミュニティ・スクールのページを新設し、年間3回以上更新する。	①学校自己評価において「目指す児童像を地域、保護者と共有する」ために積極的に情報を公開していると回答した割合が98%となった。 ②学校Webページにコミュニティ・スクールのページを新設し、年間3回以上更新することができた。	A	地域、保護者と目指す児童像を共有するため年間3回学校公開を実施したり、学校Webページを活用し積極的に情報を発信したりする。また、学級懇談会では、担任から児童の様子を詳細に伝え、年間を通して繰り返し目指す児童像の共有を図る。	・学校Webページが更新され見やすく工夫されてよい。 ・全国のコミュニティ・スクールの取組等の情報を収集し、今後高砂小学校でできることを検討するとよい。
4	<現状> ○ICTを活用した学びの改革を推進するため、タブレットの活用方法について、エバンジェリストが中心となり、OJTを重ねている。 ○第50回公開研究協議会に向け、教職員が協働し、各教科等の8パートの研究に計画的に取り組むため、日々教材研究等に邁進している。 <課題> ○経験の浅い教職員や学習指導等に不安をもつ教職員への支援を継続して実施する必要がある。 ○パートの研修、学習指導の準備、生徒指導等の対応などの業務を効率的に行うことが課題となっている。	・意欲に満ちた教職員集団を醸成する校内研修の実施 ・教職員一人ひとりに応じた働き方改革の実施	①ICTを活用した学びの改革を推進するための実践研究を、各パートにおいて行うとともに、一人1回、ICTを効果的に活用した授業を実施する。 ②管理職が経験の浅い教職員一人ひとりの学習指導等の実施状況を、毎月把握し、具体的な指導助言を行う。	①各パートの教科等において、年間を通じて、一人1回以上、ICTを効果的に活用した授業を実施することができたか。 ②経験年数5年未満の教職員が、学習指導等において、自らの課題を把握し、目標を立て、課題解決のための方策を講じた指導を実践できるようになったか。	①各パートの教科等において、年間を通じて、一人1回以上、ICTを効果的に活用した授業を実施することができた。 ②経験年数5年未満の教職員が、学習指導等において、自らの課題を把握し、目標を立て、課題解決のための方策を講じた指導を実践できるようになった。	A	次年度は、児童一人ひとりに整備されたタブレットや各教室に配備されたプロジェクターを効果的に活用した指導方法の工夫改善を8パートにおいて実践する。若手教員の育成については、管理職とともに、学習指導等における目標を設定し、毎学期、目標の達成状況を振り返るなどして指導力の向上を図る。業務改善については、教職員一人ひとりの意識の改革を行い、具体的な改善案を毎学期1回以上教職員で共有する場面を設定するとともに、今年度以上に心の余裕の生まれる職場づくりを推進する。	・公開研究協議会等の子どもたちの様子から、授業等でタブレット等のICTを効果的に活用することが有効であることが分かった。 ・教職員としての充実感を得られるようになって欲しい。 ・特定の教職員に過度の負担がかかっているか心配である。 ・高砂小の教職員の雰囲気がよく感じていると感ずる。

学校運営協議会による評価
 実施日令和5年2月21日
 学校運営協議会からの意見・要望・評価等

